

「～と思って」で終わる発話の相互行為上の機能
－質問に応答する際の「～と思って」－
Functions of utterance-final “~to omotte” in interaction
- when responding using “~to omotte” to a question -

伊藤亜紀
ITO Aki

摘要

This paper reports the interactional functions of utterance-final “~to omotte”, focusing on responding using “~to omotte” to a question. The approach of Conversation Analysis is used to analyze the types of interactional problems solved by these “~to omotte” utterances. Through the qualitative analysis, utterance-final “~to omotte” were found to have the following common points: (a) the utterances are used non-fluently and the recipients have difficulty in responding; (b) the recipients have not given the questioners clear information; (c) even under the case of (b), the recipients of utterance-final “~to omotte” accept it as an answer to their question. Considering these common points, this form serves the following two functions: (1) by verbalizing their present thought, the recipients account for not having clear answers to the questions; (2). in order to justify their actions, by reporting the past thoughts, the recipients retrospectively explain the reasons behind the previous actions.

In two examples of conversational unit called the adjacency pair, when you greet someone, the recipient should greet you back, and when you summons someone, the recipient should answer back. These adjacency pairs are the basic units of sequence organization (Schegloff 2007). By using utterance-final “~to omotte”, the recipients can react to situations where answering is relevant even if they do not have answers. Furthermore, in contexts where the recipients may be misunderstood if they do not answer a question, they justify themselves with the utterance-final “~to omotte”.

Among numerous utterances ending with the te-form, utterance-final “~to omotte” are especially used in different sequential contexts, such as in story-telling where people talk about their experiences and both in the question and response turns in a question-answer sequence, etc. As opposed to being viewed as a just conjunctive form, utterance-final “~to omotte” in interaction are an interactional form. For future research, I would like to analyze these utterances using different topics in Conversation Analysis and develop a general account of “~to omotte” in interaction.

キーワード 質問-応答連鎖、会話分析、思考の言語化、説明、正当化

1. はじめに

本稿では、日常会話に見られる「～と思って」で終わる発話が質問の応答として使用される場合、相互行為上どのような行為を成し遂げるために使われているのかを会話分析の手法を用いて質的に考察する。

動詞のテ形は通常接続助詞と考えられ、従属節末で使用される。従属節の後、主節が来ないものは「言いさし文」(白川 2009, 2015)、「言いさし発話」(荻原 2008)という名称で呼ばれることがあり、その呼び名から、「引き続き発話されるべきものが、途中で止められた、または省略された」という印象がある。しかし、日常会話においては主節にあたる発話が観察されず、従属節のみで行為として完結しているものが見られる。中でも、動詞のテ形で終わる発話(以下、テ形終わり)は日本語母語話者の発話の中でも使用頻度が高い(伊藤 2017)が、本研究でデータとした約6時間の実際の発話場面において、テ形終わりの中でも「～と思って」で終わる発話が約半数以上を占め(詳細は3.2で説明)、様々な位置に登場し、その発話の組み立ても様々である(断片1~3参照、書き起こしに関しては3.2節で説明)

【断片1】 市営のスポーツ施設についての友達同士の会話

- 1 A: あれってどこでやっとな(0.4) ヨガって.
 2 B: どこなんだろう, 私も行っしたことないもんで=
 3 A: =プールとジムの位置はわかるけど::
 4 B: うんうん.
 5 A: ヨガとかや-どこでやるのかなと思って.
 6 B: また違う-ん, ね:: (筆者撮影データ)

【断片2】 帰国したばかりで、逆カルチャーショックを受けているAとアメリカにいるBの会話

- 1 B: ahahaha 長くい過ぎたよ;
 2 A: う::ん, 困ったな::: と思って.
 3 B: hahaha

(CallHome Japanese Corpus*1((以下、CallHome))1263)

【断片3】 アメリカに住むBの友達が留学で渡米することをAに話し、Aが「よかったね」と言った後の会話

- 1 B: 何が, よかったの?
 2 (0.3)
 3 A: h いや h¥なんか::¥(0.2) .hh(0.7) よかったな::: と思っ[(て).
 (CallHome 1201)

「～と思って」で終わる発話の位置を観察すると、断片 1 は A が質問をし、B が答えを持っていないことを示した後の位置に質問者 A によって産出されている。断片 2 では B の 1 行目の質問の後の位置で産出され、肯定的な応答をした後、付け加えられている。断片 3 では、断片 2 同様、質問の後の位置に産出されているものの、断片 2 のような応答詞はなく、「何が」という質問に答えてはいない。さらに、呼気や笑い、長い間、長音を使って非流暢な産出のされ方をしているのも特徴的である。どれも発話者の思考を表す「～かな/～な」に「～と思って」という形式を持っているが、誰が質問し、誰が答えているのか、どのような質問に答えているのか、そして、どのように「～と思って」という発話を組み立てているのか等を考慮すると、接続助詞の持つ「理由」「並列」「継起」「順次動作」という機能とは別の相互行為上の意味機能があると言え、「～と思って」で終わる発話は一つの行為を成し遂げることのできる発話末の形式であると考えられる。

本稿では質問に対する応答として使用される「～と思って」で終わる発話を対象に、会話分析(以下、CA)の手法を用いて実際の会話データを質的に分析し、動詞「思う」の活用形の 1 つだと思われる「～と思って」という形式が相互行為の中でどのような行為を成し遂げているのかについて考える。

2. 先行研究と本稿の焦点

挨拶をすれば挨拶を返し、呼びかければ応答をする。隣接対と呼ばれるこのような発話の交換は連鎖組織の基本となるものである(Schegloff 2007)。隣接対の中で、質問-応答は典型的なものであるが、その応答のしかたには選好的なもの(質問に沿うもの)と非選好的なもの(質問に沿わないもの)があり、非対称的である。例えば、「これ食べる?」という質問に「うん。食べる。」(筆者作例)と返すものなどが前者の例であり、このような応答は「直ちに」、応答詞などを使って「簡潔に」、「直接的に」産出される。一方、後者は断片 4 のように

【断片 4 「アメリカの気候」 CallHome 1201】

- 1 女: あ, 本当:: (0.7) へえ:: そっち暑い:: ÷
- 2 (0.4)
- 3 男: >いや! s<あのね:: s-あ-暑い時と涼しい時があつて::

「遅れて」、「複雑に」、「間接的に」産出される(串田・平本・林 2017)。本研究では、質問の次の発話順番に「～と思って」で終わる発話が産出されるものを観察し、考察対象を限定する。

陳(2018)は質問-応答の連鎖においてテ形終わりを会話分析的に観察、分析したが、質問として発話されたもののみを対象としている。また、Shimotani & Endo(2014)はストーリーテリングに見られる「～と思って」を広く考察し、次に言われることと連鎖的、かつ文法的な

つながりがあるものを“Sequentially-linking omotte”、前のターンで言われたことと同様のつながりがあるものを“Retroactively-linking omotte”に分け、それぞれ2つのサブタイプがあることを例とともに示した。「～と思って」のみを研究対象とした研究は管見の限り Shimotani & Endo (2014) のみである。本稿ではこれまでに対象とされていない質問に対する応答として使用される「～と思って」で終わる発話を対象とする。

言い切らない形式で終わる発話に関しては、会話分析の分野以外に多くの先行研究がある(永田 2001; 白川 2009, 2015; 荻原 2008 等)。白川(2009)はテ形終わりを観察し、「事情の説明」「感嘆」「陳謝」「感謝」「非難」に機能分類し、文脈への依存性が強く、文脈上に関係する事態が存在したり、テ形で終わる発話が話者の評価的態度を表したりする場合には従属節のみで終わる文になると述べている。

さらに、「～と思う」に関して、森山(1992)は「個人情報表示」としてまとめ、「不確実表示用法」と「主観明示用法」の2つに分類している。前者は客観的な情報を表す内容が「～と思う」の内部に来るものである。一方、後者は話し手の主観的な思考内容が「～と思う」の内部に置かれ、個人的であり、主観的なものであることを明示的に示すとしている。

本稿では発話末、つまり発話の順番交替が行われてもいい位置だと認識されるために必要な発話の要件を統語、音調、行為の遂行という観点から、以下3点(Ford & Thompson 1996)とした。

1. 質問の次の発話順番に使用され、当該発話のみで質問への応答として認識される。
2. 発話末の音調が下がっている。
3. 主節にあたる発話が観察できない。

まず、研究方法、使用データ、対象発話について3節で説明する。その後4節で研究対象となる発話を含む断片を詳述し、本稿の主張の例証を行う。5節では相互行為上の機能を考察し、6節でまとめと今後に向けての課題を示すこととする。

3. 研究方法とデータの概要

3.1. 会話分析(CA)

本稿では、Harvey Sacks、Emanuel Schegloff、Gail Jefferson らが開発した会話分析のアプローチを用いる。「Why that now? (なぜ今、ここで、この行為が行われているのか)」という観点において、「～と思って」で終わる発話が相互行為におけるどのような課題を解決するための資源として使われているのかを質的に分析する。

CAは、近年その研究手法が言語学や言語教育学においても有用であると考えられている(高木・細田・森田 2016)。筆者による作例や、作られた場面での誘発された発話ではなく、実際

に人々が行なっている社会生活の一部をビデオに収め、言語的な発話や相槌に加えて、笑いや沈黙、そしてジェスチャーや視線、姿勢といった非言語行動も含めて、会話に現れるものを会話を成り立たせている資源として扱う。そして、それらを使って、人々が意識的に、または意識せずに行っている相互行為中のふるまいを発話の連鎖の中で観察、分析し、記述することを目指す科学的分野である。

本稿では、質問-応答の連鎖に現れる「～と思って」で終わる発話の前後を含め観察し、会話の参加者が当該発話をどのように発し、発話の受け手がどう受け止めたのかを中心に分析する。

3.2. データの概要・対象の限定

データ収録協力者には、研究目的と個人情報の十分な保護の上で使用することについて事前に説明をし、会話場面のビデオ記録および研究への使用について同意を得た。対象発話の前後を含めて、CA で一般的に使用されている書き起こしシステム(串田・平本・林 2017)を使用し文字起こししたものを断片として紹介し、詳述、分析を行う。付記に書き起こしに使用した記号の一覧を載せる。書き起こしは行番号、発話者、発話の順に並んでおり、本稿の対象となる発話は太字で示す。

分析する「～と思って」で終わる発話は、2 節で記述した要件に合うものを下記(1)～(4)のデータ(計 6 時間)から抽出した(表 1 参照)。

- (1) CallHome Japanese Corpus(約 2 時間) 「電話会話」
- (2) 筆者自身が撮影したビデオデータ(約 2 時間 30 分) 「大学生 3 人のおしゃべり場面」
「女性 5 名の昼食場面」「大学生、大学院生の初対面場面」
- (3) 研究協力者から提供のあったビデオデータ(約 40 分) 「大学生のおしゃべり場面」等
- (4) テレビのインタビュー番組(約 50 分)*²

表 1 抽出した発話数

発話形式	発話数		先行形式
① 「～と思って」で終わる発話 (質問の次の発話順番に使用されるもの)	11	15%	～かな、 ～な、～へん* ³
② 「～と思って」で終わる発話(①以外で、ストーリーテリングや指摘への反応等に見られるもの)	29	40%	～かな、～な
③ テ形終わり(「～と思って」を除く)	33	45%	-
合計	73		

本稿で対象とする表 1 の①として抽出された 11 例を観察すると、以下の通り 3 分類できる。

- A) 「～と思って」で終わる発話で応答するもの(6 例)

- B) 一旦終わった発話に「～と思って」を付加するもの(1例)
- C) イエス・ノー等、何らかの応答をしてから、「～と思って」で終わる発話が続くもの(4例)
- このうち、Cは本稿の研究対象としない。Cの場合、「そう」(例は後述)や「うん」(断片2参照)等の応答詞の後に「～と思って」で終わる発話が続くが、質問に対する応答はその応答詞が行なっていると考えからである。例えば、断片5はマラソン大会に参加するアイを沿道で応援するというキコがコースマップを見ながら、自分がいる予定の場所を伝えた直後の会話である。

【断片5「女性5名の昼食場面」】

- 1 アイ: そうそう. え(.) ってことはさ:: ここのさ::
- 2 キコ: うん.
- 3 アイ: 折れるところにいるってこと?
- 4 (1.6)
- 5 ナミ: 千代ざ[き:
- 6 キコ: [うん.
- 7 マチ: [千代崎:: [橋西?
- 8 キコ: [そうそうそう. この角ぐらいにしようかな:: と思って.
- 9 アイ: あ: オッケー.

それまでのキコの話聞き、1、3行目でアイはキコがいる予定だという場所に関する自らの理解を示し、キコの言う指示対象をアイ自身が正しく認識したかどうかを確認するための認識チェック(串田 2009)をしている。キコは6行目で「うん」と肯定的な応答をし、アイが指差す場所を見ながら、8行目で強めの音調で肯定的な応答「そう」を複数回繰り返し、質問に答えている。その後の「思って」で終わる発話は「そう」という応答に対する付加的な発話であり、キコはアイの持つ地図上の1点を指さしながら、3行目のアイの発話を違う形式で言い換え、「そう」という応答をした根拠を説明している。この場合、先立つ発話の説明を行なっていると考えが、応答とは言えないので、本稿では考察対象からは外す。

Bの1例に関しては、5節で触れることとし、Aに注目して4節の観察を進めるものとする。

4. 観察(該当事例詳述)

質問に対して、「～と思って」で終わる発話を観察すると、6例全てが質問に対して非選好的な反応をしており、下記の共通点a、b、cが見られた。(混乱を避けるため、「～と思って」で終わる発話に先立つ質問をした者を質問者、「～と思って」で終わる応答をした者を応答者、その後反応を返した者を受け手と表記する)

- (a) 非流暢に発話され、応答者は応答することに困難を感じている。
- (b) 応答者は明確な情報を質問者に与えていない。
- (c) (b)であるにも関わらず、受け手は応答として受け入れている。

これらをもとに考察した結果、当該発話には

1. 現在の思考を言語化し、質問者の応答要求に対し明確な回答がないことの説明を行う
2. 自らの行為の正当化を行うために、過去のある時点の思考を引用することで遡及的に発話や行為の説明を行う。

という機能があると主張する。以下は断片をもとにした例証である。

4.1. 質問に対する明確な答えを持っていないことの説明

ここでは、当該発話が「現在の思考を言語化し、質問者の応答要求に対し明確な回答がないことの説明を行う」という主張に対する例証を行う。

断片6はアメリカ留学し、大学内の語学学校に通うホノと日本に住むナナの電話会話である。

【断片6 「悩み」 CallHome 1369】

- 1 ホノ: [>でもまあ<慣れてないじゃんこういう生活. (0.2) は[いって来-
- 2 ナナ: [んん?
- 3 ホノ: 入ってきて出て行くんならいいけど.h[h
- 4 ナナ: [う[ん
- 5 ホノ: [今>ちょっと<出て行ってるまんま
- 6 でしょう::
- 7 ナナ: うんうんうんうんう:ん.(.) .hh そうよね::
- 8 ホノ: 何か大丈夫[かな:
- 9 ナナ: [でもそれ覚悟で行ったでしょ
- 10 ホノ: .hh まあ:ね.=>でもい<-実際そうなってみると<大丈夫かな:>って感じ.
- 11 ナナ: う:んまあ[ね::
- 12 ホノ: [うん
- 13 (0.6)
- 14 ナナ: あ,でも:(0.4) 何年だっけ:2年か3年
- 15 (0.3)
- 16 ホノ: う::,ま,どうしようかな::と[思っ.
- 17 ナナ: [(2)年ぐらい行けばいいけどね::
- 18 (0.6)

1 行目から 12 行目にかけて、ホノは語学学校の友達は親からの援助を受けているが、ホノ自身は自分で留学費用を稼いでから留学しており、アルバイトができない現在は収入が得られず、貯金が出て行く一方で不安であると愚痴をこぼす。ナナは 9 行目でそれを嗜めるが、14 行目でも 9 行目に関連して、留学期間について質問をする。「何年だっけ」という発話がなされていることから、この話題については以前に言及したことがあり (Hayashi 2012)、ナナはそれについて選択疑問の形式を使い留学している本人に正確な情報を再度要求する。それに対して、0.3 秒の間の後、ホノは 16 行目で明確な答えを与えない。つまり、2 年とも 3 年とも何年とも言わず、求められている情報を提供していないため、質問の形式と応答がかみ合っていない。16 行目は「どうしようかなと思っている」と言い換えが可能であると考えられるが、一定期間悩んでいるという自らの苦悩を言語化し、「う::」「ま」といったフィラーとともに「～と思って」という発話末形式で産出することで、「すぐ答えられない」「まだ答えを決められていない」という応答者の思考を明らかにし、明確な回答ができないことの説明をしていると言えるのではないか。この後ナナはこれ以上詳細な答えを求めることはしない。

もう 1 つ、断片を紹介する。断片 7 はタケ (男性) とマコ (女性) の電話会話である。マコの友達がアメリカに留学するため、この電話の少し前に飛行機に乗ったところだと説明し、今度アメリカに行く際には彼女のところにも立ち寄ろうかと思っているとマコがタケに話した後の会話である。

【断片 7 「友達訪問」 CallHome 1201】

- 1 タケ: ああ, そう, よかった [ね:]
 2 マコ: [うん. (0.3) 何が:]
 3 (0.2)
 4 タケ: え! よかったじゃん (0.3)
 5 マコ: 何が, よかったの?
 6 (0.3)
 7 タケ: h いや h¥ なんか::¥ (0.2) .hh (0.7) よかったな:: と思っ [(て) .
 8 マコ: [ahahahaha [hhh
 9 タケ: [huhuhu
 10 (0.5)
 11 マコ: .h [hu 相 (h) 変 (h) わ (h) ら (h) ず (h) .hh お (h) も (h) し (h) ろ (h) い (h) よ
 13 (h) ね::

1 行目の発話に対し、マコは 2 行目で一旦「うん」と答えたものの、1 行目で明示されていない主語に当たる部分を質問する。4 行目でタケはすぐ応答を返さず、1 行目の「ね」形式を

強く自身の意見を主張する「じゃん」という発話末に変え応答する。しかしそれが2行目のマコの質問への応答になっていないため、マコは再度同様の質問をフルセンテンスで言い直し、5行目で問いかけ直す。5行目は疑問詞疑問文であり、続く応答としては質問で使われた疑問詞に合わせて情報を返すことが求められるが、0.3秒の間の後、7行目でタケは「いや」という感動詞(Hayashi&Kushida 2013)を応答の初めに引き、質問に明確に答えるのが難しいという抵抗を示す。さらに、「なんか」といったフィラー、ポーズや吸気等を使い、言いづらさを発話全体に示しながら7行目の応答を返すが、結果「何がよかったのか」というマコの問いには明確に答えていない。つまり、現在の「よかったな」という思考内容を示すことで、それ以上答えることはできず、5行目で求められた応答を返せないことの説明を「思って」の形式で行っている。

質問に対して、明確な答えを持たない、明確に答えられないということは日常よくある。Fox & Thompson (2010)は英語での会話において、疑問詞疑問文に対する応答で、句での応答は特定の質問に対する単純な応答であり、節での応答は質問や連鎖に問題がある際に用いられると述べている。日本語での先行研究は見当たらないが、英語同様に、単純な句での応答ではなく、テ形を用いた節で応答することで、直前の連鎖に問題があることを示しているかもしれない。つまり、明確な答えを持っていない時には端的に返答することは難しく、現在の個人的な思考を非選好的に示すことで、明確に答えられない理由にあるということを説明していると考えられる。さらにこれが上で述べた「いや」という感動詞(Hayashi&Kushida 2013)とともに産出されていることも、質問に対する通常の反応ではないことの証拠であると言える。

4.2. 自らの行為の正当化

本節では、当該発話が「自らの行為の正当化を行うために、過去のある時点の思考を引用することで適宜的に発話や行為の説明を行う」ということについて断片とともに述べる。

断片8は大学の学部1年生6名の日本人学生(女子4名、男子2名)のおしゃべりである。彼らは同じ留学生支援団体(サークル活動)に所属。留学生との交流に関心があり、関連するイベントへの参加やチューターとしての活動も行っている。この断片の直前、女子全員がチューター活動をしているが、その担当チューティーは全員中国人だという話をしていて、

【断片8「チューターはしていない1」】

- 1 サツキ: [>え!^{なにじん}何人? (チューティーの国籍を問う))
- 2 (0.4)
- 3 ケンジ: おれやってないもん.[今回は.
- 4 サツキ: [↑やってない[の:?
- 5 レイナ: [えそう[なの:?

- 6 カズマ: [やってないの?]
 7 ケンジ: やなんかも::う=
 8 サツキ: =やってないんでしょ:= ((サツキ、カズマを指さし))
 9 ケンジ: =やばいな::つと[思 [って:..
 10 カズマ: [くう:ん>
 11 サツキ: [う huhu [huhu

女子全員のチューターが中国人だということを確認した後、サツキはケンジもチューターをしていると言う前提で1行目の質問を投げかけるが、その前提に反する応答がケンジから返ってきたために、4行目の最初に高めの音調で驚きを示しながらケンジに質問をし、レイナとカズマの同様の質問が続く。質問に対する答えを求められる位置であることに加えて、この3名の発話形式は全てイエス・ノー疑問文に終助詞「の」が付加されたものであり、単なる発話の内容を確認する質問ではなく、「非難」「責め」を含意する発話と聞こえる。Hayano (2013) では、イエス・ノー疑問文に終助詞「の」が付加された場合、命題に対し「予期していない」「または信じられない」といった話し手の認識を示すと述べている。このような発話の形式に加え、3人がオーバーラップしながら立て続けに同様の質問をしていること、さらに、サツキの高い音調等がケンジに対する発話をより非難するものとして強く印象付ける。また、「チューター活動をすべきだ」というこのグループの志向性もこれらの発話から観察できる。

ケンジはチューター活動をしていないことについて、7行目でフィラーや長音を交えて非流暢に話す。4、5、6行目のような責めを含意した質問に対し、反論すべき明確な理由が見当たらず、何とか応答を返しているという応答産出の苦しさが7行目を通じて観察される。グループの複数メンバーがケンジに対して「非難」のスタンスを見せている状況で、ケンジが質問に答える、つまり理由を説明しなければ、彼は「非難されるべき対象」として自らを認めたことになる。それを避けるため、ケンジは「忙しかった」「時間的に都合がつかなかった」のような事実に基づく明確な理由説明はできないものの、7、9行目で「やばいな::つとあって:..」と発話し、その当時の思考内容を言語化、つまり思考を引用して、個人的な都合によりチューター活動ができなかったことを理由として説明を行う。

終助詞「な」に関して、鈴木(2015:67)は、それまでの代表的な研究をまとめ、「独話的に用いられ、話し手自身の詠嘆、あるいは話し手が自身の感情や何らかの事態を改めて認識・確認したことを表す表現」としている。ケンジは自らがチューター活動をしないと決めた当時の気持ちを今この場で再確認し、仲間に表明しようとしているが、8行目でケンジと同様にチューターをしていないことがわかっているカズマがサツキに指摘を受けることで、話の展開がカズマを笑うという方向に向いてしまい、ケンジはこれ以上「チューター活動をしていない」ことに関する説明を続けることができない。質問者の「責め」に対して、ケンジは当時の思考を

引用することで、自らの正当性を主張し自己弁護を行おうとしているが、説明を続けられないことで、自己の正当化をしきれずに終わってしまう。

断片 9 は断片 8 の少し後の会話で、カズマがチューター活動をしない理由を述べた後に、ケンジにチューターをしない理由を改めてサツキが問い直す場面である。

【断片 9 「チューターはしていない 2」】

- 1 カズマ: そうそうそう, 申し込ん[だけど
- 2 リリコ: [せ(h) (.) ↑ 説(h) 明会に行(h) けなかったんだよ[ね:
- 3 カズマ: [> そう <
- 4 行けな[かった, そうそう[そう
- 5 リリコ: [そう(だよ)
- 6 アユミ: [あ::[:::
- 7 サツキ: [なんで? ((ケンジに指さし))
- 8 (0.4)
- 9 ケンジ: ちゃ, なんかも::: 忙しすぎて > 多分 < なあなあになっちゃうから
- 10 もうし[わけないかな::: と ↓ 思って::
- 11 サツキ: [あ:::::
- 12 (0.2)
- 13 カズマ: う::[ん
- 14 リリコ: [° 慎[重派°

サツキはケンジに向けて 7 行目を産出する。「なんで?」という疑問詞疑問文であるため、理由を問うていることは明確であるが、一旦離れた話題に再度戻って質問し、断片 8 の「やばいなと思って」という応答では十分でなかった理由の追求をしている。「なんで」のような疑問詞を使った疑問文は新しい情報を求めているというよりも、質問者の否定的な主張を伝えるために使われることがあり、発話の受け手にはチャレンジングな質問として認識されやすい (Koshik 2003) が、ケンジの 9 行目の発話の冒頭でも、「ちゃ**4」という語彙や「なんかも:::」といったフィラー、長音が使われており、ケンジ自身もサツキの発話が行う「非難」「責め」と言った行為に対して抵抗を示していると認識可能である。断片 8 同様に、「責められる」立場のケンジであるが、今度はチューティーへの配慮を示す「もうしわけない」という表現に変え、ここで応答のやり直しをする。チューターに申し込まなかったことに対して、「忙しすぎて」のように、事実に基づく理由を直接的に伝えるのではなく、「忙しすぎて(活動が)なあなあになっちゃうからもうしわけないかなと思って」と非流暢に発話している。このように過去の思考を引用することで、過去において自らが理性的に考えていたことをチューター活動をしなかつ

た理由として説明し、自己の正当化を成し遂げられていると考えられる。

このケンジの発話に対し、13、14 行目で受け手であるカズマやリリコはそれを「情報として受け取った」という反応を返し、それ以上ケンジへの追求は続かない。

断片 8 と 9 の観察を通して、質問の応答者が強く説明を求められ、それに答えなければ誤解されてしまうような場合では、事実に基づくような明確な回答はできないものの、当該発話の内部に自らの思考内容を組み込み、理由として説明することで、発話者自身にとって不利益な状態に抵抗し、自己の正当化を試みていると言える。

以上、当該発話が質問に対する応答として出現する 4 つの断片の観察をしたが、次節において、これらが相互行為上どのような課題を解決するために使われているのかを考える。

5. 考察

4 節では、4 つの断片をもとに当該発話の 2 つの機能について詳述した。本節では、なぜこの形式が使われ、また個人的な思考内容をもって説明を行なうのかについて考える。

5.1 テ形終わりによる説明という行為

質問-応答というのは典型的な隣接対であり、質問をされれば、応答を返すことが通常の連鎖における反応である。断片 6 と 7 では、質問に対する明確な答えを返すことができないことを発話者自らの思考の内容を組み込んだ当該発話で説明していた。また、断片 8 と 9 では、質問の受け手は自らのふるまいに関して責められる状況に置かれる中、産出に苦しみながらも、その活動をしなかった理由を当該発話をもとに説明することで反応している。

三原(2013)は接続助詞「て」には、「理由」「並列」「継起」「順次動作」を示す機能があると述べ、白川(2009)はテ形終わりの発話は「事情の説明」「感嘆」「陳謝」「感謝」「非難」という意味機能を持つとしているが、本稿で扱ったデータに限定すれば、「テ形」にある「理由」という意味機能、「説明する」という相互行為上の機能を用い、先述の事項(断片 8、9 チューター活動ができない)についての説明、または質問によって求められている回答を返すことができない(断片 6、7) ことに関する説明を提示していると言える。

ここで、表 1 の①の B (一旦終わった発話に「～と思って」を付加するもの) を考える。

【断片 10 「最近の若者」】

- 1 ナミ: n で:: (0.3) やるけど:: (0.2) なんかその↑発展する::° ことが:できないか
- 2 ら::°
- 3 (0.9)
- 4 ナミ: が-, 学校::あの::::: なんか先を読むとか::
- 5 (0.9)

- 6 アイ: ↑なんでだろうね
 7 ナミ: う:ん
 8 (0.8)
 9 アイ: 教育?=
 10 キコ: =え,<優しすぎへん>,周りが.[=と思って.
 11 マチ: [あ!
 12 ナミ: う::ん
 13 マチ: 優しすぎる.

この断片の直前、キコは自身が勤めている会社に最近入社してきた新入社員が仕事ができないことについて不満を述べる。それをきっかけに、最近の若者が「先を読む」といったことができないと言うナミの発話(1、2、4行目)に対して、6行目でアイが理由を問いかけている。しかし、それに対し、ナミからは反応(7行目)は得られたものの、誰からも明確な回答が得られないため、4行目でアイ自ら、回答の選択肢として考えられるものを提示する。それを聞いてすぐキコは「え」と自らの想定とアイの発話がずれていることへの気づきを示し(Hayashi 2009)、「若者の周りにいる人達が優しすぎるのではないか」と主張する。この発話は質問の次の発話順番で登場しているものの、3.2節においてAに分類された6例とは発話の組み立てが大きく違うため、同列に考えることはできない。その理由は、まず非流暢に話されておらず、キコはためらいなく発話しており、さらに、「～と思って」に先行する部分に倒置が起こっていることと「周りが」の音調が下がっていることから、ここで一旦発話が完了していると思われるからである。これは6行目で発話順番を交替してもいいと考えたマチが「あ!」と発話していることからわかる。しかし、実際にはキコはここで発話を止めずに、「～と思って」という発話を付け加える。つまり、「～と思って」の部分は一旦終わった発話に対し、キコが急遽付け加えたものだと言え、「～と思って」がなければ、キコの発話は4行目のアイの発話に対し、強く抵抗を示しながら主観的な意見を述べるという行為になる。森山(1992)は「と思う」という形式には個人的な意見や主張であることを断ることで、主張を和らげる機能があると述べているが、ここでのキコの発話は「と思う」によって自らの主張を和らげ、アイの意見を全否定することなく、周りに同調を求めているのではないか。そして、それを「～と思って」の形式にすることで、「最近の若者が仕事のできない理由」を説明する機能を使い、前に出てきた行為や発話に関連する主張であることを示していると考えられる。結果として、ナミはキコの主張を受け入れる反応を示し、マチはキコの発話形式をほぼ繰り返すことで同調を示している。

Bの例が1例しか見つけられなかったため、これ以上議論を深めることは難しいが、表1の①に当てはまる11例を見ると、Cの発話では応答詞によって答えた根拠を説明することとし、Bの発話では自らの主張を和らげ、自らが行なった行為の説明として産出されていた。本稿で

の A に関する主張と合わせて、「～と思って」という発話形式が広く説明という行為を成し遂げるために使われるということは明らかである。

6. 結論と今後の課題

本研究では、日常会話に見られる「～と思って」で終わる発話が質問の応答として使用される場合、それがどのような機能を持ち、相互行為上どのような行為を成し遂げるために使われているのかを会話分析の手法を用いて質的に考察した。約 6 時間の日常会話のデータをもとに観察すると、統語、音調、行為の遂行という観点から決められた要件を持つ「～と思って」で終わる発話には、(a) 非流暢に発話され、話し手は応答することに困難を感じている、(b) 話し手は明確な情報を質問者に与えていない、(c) (b) であるにも関わらず、受け手は応答として受け入れているといった 3 つの共通点が観察された。CA の手法を使い、詳細に分析を行うと、「～と思って」で終わる発話は相互行為上

1. 現在の思考を言語化し、質問者の応答要求に対し明確な回答がないことの説明を行う
2. 自らの行為の正当化を行うために、過去のある時点の思考を引用することで遡及的に発話や行為の説明を行う

という機能を持っていると考えられる。質問に対して明確な答えは持っていないけれども応答を求められているという状況、または質問を通して説明を求められており、ここで答えなければ自らが誤解されてしまうという状況に反応していると考えられる。

本稿では「～と思って」という 1 つの発話末の形式を取り上げ、動詞「思う」の活用形の 1 つだと思われる「～と思って」という形式が相互行為上の機能を持つことがわかった。しかし、質的な観察、考察であるとはいえ、発話対象の数は少なく、かつ今回の対象は質問-応答の連鎖上、応答の位置に現れる「～と思って」で終わる発話のみである。「～と思って」の日常会話における頻度は高く、ストーリーテリングの中、質問-応答以外の連鎖においても出現するため、今後はより対象を増やし、様々な角度から「～と思って」を観察し、相互行為としてどのような課題を成し遂げるために使用されるのか、より汎用的な説明が可能なのかを考えていきたい。

注

*1 『CallHome Japanese Corpus』はアメリカ在住日本人と日本にいる知人による電話会話データであり、The TalkBank Project (MacWhinney 2007) にて公開されている。

*2 テレビ番組では、会話が編集される可能性もあるが、本稿で対象と考えられたものは、前後の発話の流れから一まとまりだと考えられる発話場面であったため、研究対象となるべき 1 例とした。

*3 関西弁(キコは大阪出身)。東京方言の「～ない」に当たるもの。

*4 これまでの文脈から、「違う」という発話の短縮形だと考えられる。

引用文献

- Ford, C. E., & Thompson, S. A. (1996) Interactional units in conversation: Syntactic, intonational, and pragmatic resources for the management of turns. In E. Ochs, E.A. Schegloff, & S.A. Thompson. (Eds.) *Interaction and Grammar* (pp.134-184). Cambridge, U.K.: Cambridge University Press.
- Fox, B.A. and Thompson, S.A. (2010). Responses to Wh-Questions in English Conversation, *Research on Language and social interaction*, 43(2), 133-156.
- Koshik, I. (2003). Wh-questions used as challenges, *Discourse Studies*, 5, 51-77.
- MacWhinney, B. (2007). The TalkBank Project. In J.C. Beal, K. P. Corrigan and H. L. Moisl. (Eds.) *Creating and digitizing language corpora: Synchronic databases, Vol. 1.* (pp.163-180). Houndmills: Palgrave-Macmillan.
- Schegloff, E. A. (2007). *Sequence organization in interaction: A primer in conversation analysis I*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Hayano, K. (2013). Territories of knowledge in Japanese conversation (unpublished doctoral dissertation). Nijmegen. The Netherlands: Max Planck Institute for Psycholinguistics.
- Hayashi, M. (2009). Marking a 'noticing of departure' in talk: *Eh*-prefaced turns in Japanese conversation, *Journal of pragmatics*, 41(10), 2100-2129.
- Hayashi, M. (2012). Claiming uncertainty in recollection: A study of *kke*-marked utterances in Japanese Conversation, *Discourse Processes*, 49(5), 391-425.
- Hayashi, M. & Kushida, S. (2013). Responding with resistance to *Wh*-questions in Japanese talk-in-interaction, *Research on Language and Social Interaction*, 46(3), 231-255.
- Shimotani, M. and Endo, T. (2014). Sequential patterns of storytelling using *omotte* in Japanese conversation, *Journal of Japanese Linguistics*, 30, 33-53.
- 伊藤亜紀. (2017). 「メキシコ人日本語学習者の自由会話における言いさし文の産出傾向一」『南山言語科学』12. 41-60.
- 荻原稚佳子. (2008). 『言いさし発話の解釈理論—「会話目的達成スキーマ」による展開』春風社.
- 串田秀也. (2009). 「理解の問題と発話産出の問題—理解チェック連鎖における「うん」と「そう」」『日本語科学』25. 43-66.
- 串田秀也・平本毅・林誠. (2017). 『会話分析入門』勁草書房.
- 白川博之. (2009). 『「言いさし文」の研究』くろしお出版.
- 白川博之. (2015). 「「言いさし文」の文法」『日本語学』34(7). 2-13.
- 鈴木智美. (2015). 「意見表明に用いられる「かなと思う」—対立・摩擦を避け内に向かう言葉—」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』41. 61-78.
- 高木智世・細田由利・森田笑. (2016). 『会話分析の基礎』ひつじ書房.

